

## 後期軍記『朝倉始末記』

### ―伝本の分類、その性格―

瀬戸 祐規

はじめに

後期軍記は軍記物語史において終焉期に位置付けられている。室町・戦国の両軍記に区分されていた後期軍記は、近年、特に戦国軍記に関して、作品が記述対象とする時期よりも、その作品が成立した時期で区分するほうが、より適切ではないか、という提唱が笹川祥生氏によってなされている。<sup>(注1)</sup>氏の区分によれば、

A 戦中の文学として―永祿から慶長まで―

B 戦後の文学として―元和から寛文まで―

C 批評あるいは批判の文学として―延宝以後―

となり、Aはこれまでの区分からすれば、より純粹な意味での戦国軍記に相当するといえる。となると、B・Cは戦国軍記以降の軍記ということになり、笹川氏がこれらを近世軍書とされ

るように、中世における軍記物語は、戦国軍記以降、近世では、軍書という形に転化しつつも、展開されているといえるのではないだろうか。さらに、筆者は、読本といわれているものの一  
部へも、同様の展開がなされているのではないかと推測する。

このように考えるならば、確かに、中世における軍記物語史の終焉として、戦国軍記までの後期軍記は位置付けられるであろうが、笹川氏によるAの戦国軍記と、B・Cといった近世に成立した軍書との間に、呼称の相違はさておき、明確に軍記であるか否かという区分を求めることは難しいように思われる。もちろん、軍記とは明らかにいえないものも軍書の中には含まれているのであって、軍書一般を全て同一にみなすことはできないし、そのことに対しては、十分注意を払うべきではあるが、これら軍書も軍記物語史の中に位置付けるべきではないだろうか。となると、中世に限定しない広義の軍記物語史において、

終焉期である後期軍記の中に位置付けるべきであろう。だが、このことによって、後期軍記は単に終焉期のものとしてのみの位置付けだけでなく、近世への広がり、他のジャンルへの転化ということも考慮した位置付けが必要となってくるのではないだろうか。そのようなことを前提として、以下『朝倉始末記』について考察していきたい。

# 一 『朝倉始末記』の内容・位置・意義

『朝倉始末記』（以下、『始末記』と称する）は、朝倉氏の由来に始まり、朝倉氏と加賀一向一揆との関係、特に十一代義景を中心とした朝倉氏の興亡、並びに越前一向一揆の終息に至る迄を描いた軍記である。諸本は写本のみであり、四巻・八巻・十巻・十一巻（後者二つは系図一卷を含む）とさまざまな形態を持つ。作者・成立時期は不詳であるが、心月寺旧蔵本（明治三十三年焼失）の奥書により、寛文十二年に心月寺末寺松雲院三代住持である竹峯樵突によって改編されたことが窺い知れる。この奥書には、天正七年の記述もあり、これは改編の際に用いられた本の成立年であろうと考えられているが、奥書の形式や内容を考え合わせると、若干疑問があるため、天正七年の成立であるとは断定し難い。しかし、少なくともそれよりも少

し下った時期、即ち天正後半から慶長頃までには、改編される以前の形の『始末記』（これは原始末記を指しているのではない）が存在し、成立していたのではないかと考えられる。

先の笹川氏による区分に従って『始末記』を位置付けるならば、心月寺旧蔵奥書から、戦後の文学に相当し、近世軍書としたい所ではあるが、これは改編されたものであることから適切であるとは言いがたい。また、改編される以前の形を持つと考えられるものが現存するものの、その成立年が、現状では確定し得ないことから、戦中の文学としての戦国軍記とするにも抵抗がある。よって、ここでは、敢えて後期軍記と位置付けておきたい。

次に、『始末記』を扱う意義について述べておく。

第一点として、後期軍記の特色の一つである類書の関係を考察する上で、朝倉家軍記類は、類書間の関係が比較的複雑であることから、有益な例の一つであると考えられることが挙げられる。『越州軍記』や『賀越闘諍記』・『朝倉軍談』・『朝倉義景記』等の類書を有する朝倉家軍記類において、『始末記』がこれら類書の関係の中心に位置付けられ、類書がそれぞれ異なった『始末記』本文を参照している可能性もあり、類書の成立過程や先後関係を考察する上で重要であることから、単に『始

末記』本文の流動がみられるという点だけでなく、分類を行なう必要があると考える。

第二点として、これも後期軍記の特色の一つであるが、『太平記』の影響について考察する上で、本作品にはその影響が比較的多く表れており、かつ、それらは類型的な表現に止まらないものであることが挙げられる。

## 二 分類に関する先行研究

先行研究として、まず、松原信之氏による「朝倉始末記の成立とその変遷」<sup>注3</sup>が挙げられる。氏はその中で『始末記』諸本の分類を行なっており、以下にその結果を整理して記せば、

甲類本（天正四・五年成立）

小出本

乙類本（天正七年成立）

史籍本・鳥井本・内閣本・京

大本・狩野本・野尻本

丙類本（寛文十二年成立）

心月寺本・横浜本・松平本・

大野本・橋本本・新郷本

丁類本（江戸中期頃成立）

歴館本・田中本・水島本・西

岡本

となる。また、同論文において、松原氏は、小出本から甲類本を、「内容構成や記述事項から判断して、むしろ乙類本より

も古く、天正七年以前に成立したもの」と想定され、「始末記」の草稿本として著述されたものがこの甲類本の原本であつて、この系統を踏む写本の「一本」として小出本を、また、丙類本の原本として心月寺本を位置付けている。

松原論文以降、『始末記』について論じたものとして、笹川氏『朝倉始末記』の本文を考える―作者の批評精神その他<sup>注3</sup>」がある。

この論文において、氏は松原氏による分類をおおむね肯定できるものであるとしているが、「諸本の成立事情と、史料的价值についてな若干の不確定要素がある」とし、また、「諸本の成立の先後を論ずる場合、戦国軍記が変貌して行く過程の、通常の姿として、政道や秩序に作者の関心が高まるのは、晩期の状況であることが多い。その点、史籍本は、かなり後出の本であろう。しかし、小出本は『太平記』の利用について若干疑問もあり、最先出本と断定することは躊躇される点もある。少くとも、現存本には脱文も有り、原小出本が存在した筈である」として、松原氏の分類に疑問を呈している。

以上、先行研究について示してきたが、松原・笹川両氏の論文において、その位置付けに関して問題とされている小出本は、『始末記』伝本の分類、並びに成立と変遷についての考察を行

なう上で、重要な位置を占めているといえる。したがって、本稿においても、この点を重視しつつ、論を進めていきたい。

### 三 伝本の分類

それでは、先行研究を踏まえつつ、筆者なりの分類を試みていくこととする。

まず始めに、本稿においては、松原論文で用いられていた伝本の内、小出本・史籍本・京大本・内閣本・野尻本・横浜本・松平本・橋本本・田中本を用い、それ以外のものとして、加越能本・東大本・春日社本を用い、以上を考察の対象としたことを断っておく。<sup>(注4)</sup> 前者についての解説は、松原論文を参照して頂くこととして、ここでは、新出資料である後者の書誌事項について示しておきたい。

1 金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵本（加越能本）

・函架番号 一六・八二／一二三

・表紙 黄土色無地に朱色と縹色で三角を散らした厚表紙（原

表紙か）縦一六・七糎 横一八・三糎

・題簽 表紙左肩 白色無地 鳥の子紙 書写題簽（本文と同筆）縦二三・二糎 横三三・二糎 「朝倉始末記 幾」

・内題 「朝倉始末記卷第幾」

・序題 「朝倉始末記」

・目録題 第一冊（卷二）「朝倉始末記卷一」

第二（卷二）・三（卷三）冊「朝倉始末記卷第幾」

第四冊（卷四）「朝倉始末記第四」

・尾題 第二冊（卷二）のみ「朝倉始末記卷第二終」とあり。

・見返し等 見返し 本文共紙 鳥の子紙

遊紙 本文共紙 第一冊は後に一丁、第二冊は後

に三丁 第三・四冊は遊紙ナシ

・本文料紙・装丁 鳥の子紙列帖装 各冊三括で、その内訳は

第一冊 六枚・七枚・六枚、第二冊 六

枚・八枚・六枚、第三冊 五枚・六枚・五

枚、第四冊 四枚・七枚・四枚 綴糸は、

第一・四冊白色、第二冊青丹色、第三冊水

色

・一行面数・字詰等 一面一二行漢字片カナ交り 一行約一三

字から一九字詰。字面高さ一四・五糎。

一筆書写、朱点・朱引ナシ。墨による附

訓・書入れ多し。

・冊数 四冊（一卷一冊）

・墨付丁数 第一冊 三五丁。第二冊 三五丁。第三冊 三〇

丁。第四冊 二八丁。

・奥書・識語 第四冊（巻四）の末に次の跋文がある。

右一部四冊者、所持之加越闘争記、且御成

于義景之館之事加書焉。此本超闘争記改

正之書云々。仍置闘争記写之。有越前軍

記者。又此次有義景記（朝倉始末記義實記如  
此通稱）。

予所持之越前軍記、改表題為義景記（舊  
面）。

同事  
故然。因之、御成之巻在両部衍文也。此事

疑在歟之故跋書者也。畢竟始末記者

与闘争記別名同書、御成之事存始末

記。又越前軍記与義景記異名同記而、

越前軍記書御成之事、義景記略之（下）。

義景記者右越前軍記外題改之故、

御成之巻衍出也。」

元禄七年仲冬書写 二部借于堀氏

（※句読点は私に付した。）

・その他 a 貼紙ナシ

b 印記 各冊とも「46047（〜50）／33・

12・10／金沢市立図書館」（青印直

徑三・〇糶円）あり。

2 東京大学総合図書館南葵文庫蔵本（東大本）

・函架番号 G二四／九一六

・表紙 黄土色無地厚表紙（後補か） 縦二三・三糶 横一六・

九糶

・題簽 表紙左肩 白色無地金箔散らし 本文・遊紙・見返し

と別紙でやや厚め（後補） 鳥の子紙 書写題簽（本

文と別筆） 縦一六・六糶 横三・三糶 「朝倉始末

記 幾

・内題 「朝倉始末記卷第幾」 第三冊（巻三）のみ「朝倉始

末記卷第一」

・序題 「朝倉始末記」

・目録題 第一冊（巻一）「朝倉始末記卷一」

第二（巻二）・三（巻三）冊「朝倉始末記卷第幾」

第三冊（巻四）「朝倉始末記第四」

・尾題 第一（巻一）・二（巻二）冊「朝倉始末記卷幾終」

第三冊（巻三）「朝倉始末記卷三」

第三冊（巻四）のみ尾題ナシ

・見返し等 見返し 後補 楮紙

遊紙 本文共紙 前に一枚（第三冊のみ前後一枚）

ただし第一冊のみ見返しと同紙で後補

・本文料紙・装丁 楮紙袋綴 全面裏打 綴糸は白色 四ツ目綴

・一行面数・字詰等 一面九行漢字片カナ交り 一行約一七字

から二五字詰。字面高さ二一・四糎。一

筆書写、朱点・朱引ナシ。墨による附訓・

書入れ多し。

・冊数 三冊（巻一・二は一巻一冊。巻三・四は二巻一冊）

・墨付丁数 第一冊 三三丁。第二冊 三八丁。第三冊 五七

丁。（うち巻三 二九丁、巻四 二八丁）

・奥書・識語 第三冊（巻四）の末に次の書写奥書がある。

宝永五年五月廿五日写之元本田屋氏

・その他 a 貼紙ナシ

b 各冊前遊紙左肩に原題簽が貼り付けられている。ただし「壹」「一」「三」のみ。

第一冊 白色無地 鳥の子紙 書写題簽（本文

と別筆） 縦一二・〇糎 横三・一糎

「朝倉始末記 壹」 他の原題簽とは

異なる。

第二・三冊 白茶色 薄墨の流水模様が若干

残っている。 楮紙 書写題簽

（本文と同筆か。） 縦一一・九

糎 横二・九糎 「朝倉始末記

幾」

c 印記 各冊とも「東京帝国大学図書印」（朱印

五・九糎角）、「南葵文庫」（朱印三・三

糎角）等あり。

3 福井市安波賀町春日神社蔵本（春日社本）

外題・内題とも「朝倉記」。十巻五冊本（うち本文九巻、終

巻に「日下氏朝倉家系図略」あり。奥書はなし。『（註）越前一向一

揆関係資料集成』（同朋社出版 昭和五十五年）に所収。

次に、以上の伝本を章段構成、記事等の有無・相違に基づき

本文を比較した結果、ごく簡略な形ではあるが、伝本の分類は、

誤解を恐れずに記せば、次のようになる。（註）

I 類 八巻本 京大本・内閣本・史籍本・狩野本

四巻本 加越能本・東大本・野尻本

II 類 橋本本・横浜本・松平本

III 類 春日社本・田中本

IV 類 小出本

IV 類小出本の位置付けについては後述するが、ここでは、野

尻本と狩野本について補足しておく。

野尻本は、卷一から卷四までの「朝倉始末記」と「越前軍記第五上・下」（これは二卷本『越州軍記』上・下に相当する）との取り合わせ本である。本稿では、『始末記』本文の分類という観点から、後者を考察の対象外とした。前者の本文は、I類本文に相当し、跋文より四卷本『始末記』の存在が窺える加越能本と本文のみならず、余白部分にみられる書き込みまでも大部分において一致していることから、直接的な親子関係ではなくとも、何らかの書承関係が想定できるのではないかと考える。また考察の対象外とした後者の余白部分にも書き込みがみられ、それらは若干簡略ではあるものの、II類本文に相当するのではないかと思われ、現野尻本が複雑な成立過程を経ていることが窺い知れる。

狩野本は、根幹となっている本文はI類本文である。だが、誤脱によるものであろうか、あるいは、簡略な本文だからであろうか、同類の他の伝本にみられる記事・文章等を欠く箇所を数箇所指摘することができる。また、全巻にわたってII類本文の記事・文章等の一部が取り入れられている。

では、以下具体的に各類の性格について考察を行なっていく。

#### 四 II類本増補章段

II類本はI類本を底本として全巻にわたって増補・改訂がなされているのであるが、その中で特に注目すべきものとして、卷九卷末に増補された「一揆等焼越知山大谷寺附長泉寺・田谷寺焼事」「永平寺一揆等寄来事」（以下、前者を章段A、後者を章段Bとする）の二章段が挙げられる。<sup>注6</sup>

この二章段には共通する部分がみられる。一つは、作品の本筋とは直接的な関わりを持たず、ともに越前国の諸侍を悉く討ち果たした一向一揆が、国中の神社仏閣を我が宗にせんと企むことで章段が始められていることであり、もう一つは、章段内の構成を考えた場合、重点が置かれているのは伝記記事（具体的には、章段Aは「泰澄伝記」、章段Bは「道元伝記」をさす）であって、章段名に直接関わる内容は簡潔な記述であり、それらは伝記記事の前後に付属する形で存在していることである。前者の章段の始まりに関しては、卷二の次の記述を想起させる。

斯テ高田ノ寺々へ攻入々々宗門ヲ替サセテ皆本願寺ニゾ成ニケル、違変ニ及ブ寺々バ仏閣悉ク焼失シ、

横浜本「高田専修寺大谷本願寺開基前後附富樫滅亡之事」

斯テ高田坊主皆散散ニ成ニケレバ、加賀一國ハ悉ク本願寺ノ仕配ニテ一揆ノ領トゾ成ニケル。依之加州ノ一揆等逆威ノ余リ荐リニ徒党ヲ相結ビ、一天四海ヲ皆我宗旨ニ成ントテ、先越中ヲ討平ゲ、能登ノ國マデ攻從ヘケル程ニ、

横浜本・同右

これらは、加賀一向一揆が守護富樫政親を攻め滅ぼし、その後高田派の寺々へ攻め入って皆我が宗旨にするという場面である。その後、一揆は越前へ数度の侵攻を行なうが、越前一國の征服には至らなかつた。朝倉氏滅亡後、ようやく一國を支配することになるのであるが、越前における一向一揆の他宗に対する記述は、Ⅰ類本にはみられない。

後者について、これらの章段内における重点は伝記記事にある。だが、「泰澄伝記」も「道元伝記」も章段名が示す出来事以上に作品の本筋とは関わりを持たない。しかし、Ⅱ類本において増補された記述をみると、曹洞宗・白山権現に関するものが比較的多い。曹洞宗に関する記述は、「道元伝記」を含め、わずか三例に過ぎないが、Ⅱ類本編著者の属する宗派という点で関わりを持つ。白山権現に関しても、「道元伝記」中に、「白山権現ハ予ガ宋地ヨリ帰朝ノ砌リ碧岩書写ノ助筆ニ預リ、帰路ノ船中ニモ加護ヲ蒙リ特ニ神恩不淺」とあり、曹洞宗との関連

が窺える。白山権現に関する記述は、「泰澄伝記」の他に、卷九「土橋式部大輔討死附平泉寺院主失命并千王丸事」中の「平泉寺縁起」記事、卷十「遁万死得一生并焼豊原寺事」中の「豊原寺縁起」記事にみられ、Ⅱ類本増補記事全体に占める割合は非常に大きい。となると、これらもⅡ類本編著者との関わりを持つものであると考えられるのではないだろうか。

以上のことから、これらの章段においては、記述内容が史実に基づくものである可能性は否定できないが、Ⅱ類本編著者が最も増補したかつたのは伝記記事であり、増補に際して作品の本筋と関連を持たせるために、卷二の一向一揆に関する記述に発想を求めて、章段全体を構成し、増補したのではないかと考えられる。

では、これら伝記記事の依拠資料として、どのようなものが考えられるのであろうか。

始めに、「泰澄伝記」について、泰澄に関する主要な伝記を収載したものに『福井県史 資料編1 古代』がある。そのうち、正中二年書写の奥書を有する現存最古の写本である金沢文庫蔵『泰澄和尚伝記』、元和五年書写の奥書を有する福井県丹生郡朝日町大谷寺越知神社蔵『泰澄大師伝記』、天徳元年成立と伝えられる『元亨釈書』十五所収「越知山泰澄」（以下、そ



れぞれ『和尚伝記』、『大師伝記』、『釈書』とする）を取り上げ、比較のため、以下に冒頭部分を記す。

抑釈泰澄姓者三神氏、越之前州麻生津人、父安角。母伊野氏、夢白玉入懷而有孕。白鳳十一年六月十一日生ル時二白雪降落、庭宇皚々産屋之上二積寸余。

『始末記』 卷九・章段A「泰澄伝記」

白山行人泰澄和尚者、本名越大德、神融禪師也。俗姓三神氏、越前国麻生津三神安角二男也。母伊野氏、夢取白玉水精、入懷中乃妊矣。月満産生時、六月雪降下、厚一寸、只産屋上庭園陸地、素雪皚々碧水凜々、此乃天淳名原瀛真人天武天皇飛鳥浄御原宮御宇白鳳廿二季壬午歳六月十一日誕生矣。

『泰澄和尚伝記』

抑泰澄和尚者、本名越大德、神融禪師、俗姓三神氏、越前国麻生津三神安角二男也。母伊野氏、夢取白玉水晶入懷中乃妊矣。月満産生時、六月雪降下厚一寸、只産上庭園隣地、素雪皚々碧水凜々、此乃天淳名原瀛真人天武天皇飛鳥浄御原宮御宇白鳳十一年<sup>壬午</sup>歳六月十一日誕生矣。

『泰澄大師伝記』

釈泰澄、姓三神氏、越之前州麻生津人、父安角。母伊野氏

夢、白玉入懷、而有孕。白鳳十一年六月十一日生、時白雪降落、庭宇皚皚、産屋之上積寸余。

『元亨釈書』十五「越知山泰澄」

『大師伝記』は、記述内容から『和尚伝記』とはほぼ同様であり、その影響を受けたものであるといえる。『和尚伝記』と『釈書』との関係については既に指摘されており、そこでは、養老六年泰澄奈良上洛の際の随行者を浄定行者とするか臥行者とするかの相違が挙げられている。この点と記述内容から『和尚伝記』『大師伝記』と『釈書』とに区分され、『泰澄伝記』は後者に位置し、『釈書』と最も近い関係にあるが、『釈書』そのものではなく、『泰澄伝記』末には『釈書』ではなく、他者に近い記述も一部にみられる。

だが、全体として『釈書』と近い関係にあること、また『釈書』が慶長版・元和版・寛永版・寛文版と刊行されており、Ⅱ類本原本の心月寺旧蔵本の成立年である寛文十二年より若干時代が下るものの、『元亨釈書和解』（天和三年刊）、『元亨釈書微考』（延宝三年刊）等、『釈書』に関するさまざまな著作の刊行から、心月寺旧蔵本成立当時も『釈書』が広く享受されていたと考えられること、この二点から、やはり『釈書』が主な資料であつたのではないだろうか。

次に、「道元伝記」について、道元の伝記は、先の『釈書』を始め、『道元禪師行狀建擲記』・『永平寺三祖行業記』・『伝光録』・『碧山日録』・『繼灯録』<sup>(注10)</sup>等、さまざまな資料に所収されているが、管見に及ぶ限りでは、それら主要な伝記資料との直接的な関係は窺えない。

しかし、元禄初め頃の成立とされている近世軍書『明智軍記』<sup>(注11)</sup>には、先の伝記資料に比べると比較的近い記述がみられる。

抑当寺開山道元和尚ト申ハ、天曆ノ帝ノ貴苗後久我大相国通光公ノ御孫大納言右大将通忠卿ノ二男也。(中略)越前二下向御座テ吉田郡志比庄ニ一字ノ精舍ヲ草創シ給フ。当山ハ震旦ノ天童山ニ少モ不違、寂寞タル深谷自然ノ佳境仏法興隆ニ吉祥ノ靈地也トテ、即山号ヲ吉祥山ト名付ラレ、寺号ハ天竺ヨリ震旦ニ仏法ノ渡ルハ永平年中也、今又漢土ヨリ吾朝へ微細ニ仏心宗ヲ伝ルニヨリ三国通用ノ理ヲ以テ震旦ノ年号ヲ取り永平寺ト号シ給フトカヤ。(中略)又宝治元年ノ秋、天下ノ執權北条相模守時頼朝臣ノ請待ニ依テ道元鎌倉へ下向アリケレバ、時頼既ニ菩薩戒ヲ受ケ尊崇他ニ異ニシテ帰依渴仰甚ク、種々留メ奉ラレケレ共越前ノ靈地ヲ貴ミテ翌年ノ夏帰寺シ給フ。

『始末記』巻九・章段B「道元伝記」

義景ノ親父彈正左衛門孝景ノ十七回忌ニ当リ給フニヨリ、朝倉殿、永禄七年三月二十二日払曉ニ一乗ヲ出駕有テ、吉祥山永平寺へ参詣セラル。仏事逐テ諸閣順堂ノ後、当寺ノ開基ヲ尋問ル。住持祚玖和尚答テ曰ク、抑開山道元和尚、俗姓ハ、久我右大将源通忠郷ノ次男也。(中略)寛元二年ノ夏、越前二下向有テ、吉田郡志比庄ニ一字ノ精舍ヲ建立シ、号 吉祥山永平寺。山ハ、仏法興隆ニ吉祥ノ位アリテ、太白天童ニ髣髴ス。寺号ハ、天竺ヨリ震旦へ仏心宗ノ渡リケルハ、漢ノ永平年中也。今又、震旦ヨリ日本へ曹洞宗ヲ伝フルニ依テ、三国通用ノ理ヲ合へ、異国ノ年号ヲ取テ、永平寺ト云リ。(中略)扱又、宝治元年ノ秋、北条相模守時頼朝臣ヨリ、頻リニ請待ニ依テ、鎌倉へ下向セラレ、則最明寺時頼禪門ニ菩薩戒ヲ授ケラル。禪門尊崇他ニ異リシカ共、当寺ノ靈地ヲ慕テ、翌年ノ夏帰山シ給フ。

『明智軍記』巻一「朝倉義景永平寺参詣事付城地事」

『明智軍記』は、心月寺旧蔵本より後出の作品であることから、依拠資料であるとはいえないが、笹川氏がI類の略本であると位置付けている『朝倉軍談』を参照していると考えられていることから、筆者は、『明智軍記』の該当部分は、『始末記』の影響を受けていると考えたい所である。だが、既に二木謙一

氏によつて、寛文四年から同十一年に成立したとされる『南越温故集』所収の『吉祥山永平寺略由來』を参照したのではないかと指摘されている。<sup>(注12)</sup>それを考慮に入れるならば、この伝記において、「道元伝記」は『南越温故集』を依拠した（即ち『明智軍記』とは兄弟関係であることになる）、あるいは、『南越温故集』が依拠した資料を「道元伝記」も依拠資料とした（即ち『南越温故集』との兄弟関係）と想定することが可能ではないだろうか。

## 五 IV類小出本

小出本は、その最先出性が問題とされてきた伝本である。以下、その点に関して考察を試みることにしたい。

最先出性について考察する上で重視すべきこととして、章段構成と重出記事とが挙げられる。

前者について、小出本巻一・二の章段構成は、他の類と大きく異なり、独自のものとなっている。小出本は、朝倉氏歴代当主の事蹟を当主ごとに章段をなし、整理した形で章段全体を構成している。他は、七代敏景（孝景）までを巻一「朝倉家由來之事」内で、以降十一代義景までを同「敏景入道英林子孫繁昌之事」内で記しており、直後の章段「朝倉孫五郎出奔」の

繋がりがみられず、小出本のような意図は窺えない。小出本巻一・二のこのような構成は、朝倉氏滅亡以前の永禄十二年に成立したと考えられている『朝倉家伝記』等、先行の伝記や系図等の資料との関連を想起させ、それらを元に成立したのではないかと考えられ、他よりも古い形であると思われる。

次に、後者について、独自の章段構成をなす巻二と他の類と同様の構成をなす巻三において、重出記事がみられる。その例として、若州での逸見氏の反乱の際、守護武田氏の加勢要請に応じて、朝倉宗滴が大将となり、若州へ進發し、敵方の延永源六を討伐する、「延永討伐」記事が挙げられる。以下にその本文を記す。

永正十四年丁丑、若狭ノ逸見俄ニ武田ニ心替シテ、丹後ノ延永源六ト語ヒ、八千余騎ニテ若州ヘ攻入ル時、孝景ハ武田大膳大夫ノ婿ナレバ、越前ヘ武田類葉ノ内ヲ人質ニ送り、加勢ノ事ヲ頼ミ来リ、朝倉金吾孝景ヲ大将トシテ若州ヘ進發セシム。延永其勢ニ恐テ一戦ニモ不<sup>レ</sup>及引退キ、丹後ノ国伽佐郡庫橋ノ城ニ楯籠ル。教景統テ攻入、手痛城ヲ取巻、昼夜揉ニ揉デ攻詰ラレ、源六終ニ降参シ、死ヲ遁テ逃退ク。其時源六、（歌省略）ト詠ズルト云々。教景城ヲ請取、伽佐郡ヲ取敷、武田ヘゾ渡サレケル。

小出本卷二「若狭ノ武田ヘ加勢之事」

永正十四年、若州ノ逸見氏俄ニ武田殿ニ意替シテ、丹後ノ延永源六ト云シ者ヲ語ヒ、八千余騎ニテ若州ヘ攻入シカバ、其時霜台孝景、武田大膳大夫ノ婿ナル故、加勢之事申越シケレバ、即教景大将トシテ若州ヘ進発有ケル処ニ、延永其威ニ恐テ一戦ニモ不<sup>レ</sup>及忽引退テ、丹後国伽佐郡庫橋ノ城ニ楯籠ケルヲ、教景続テ攻入、即城ノ四面ヲ取囲ミ、息ヲモ繼ズ揉ニ揉テ攻ラレケレバ、源六終ニ降参シ、死ヲ遁テゾ出ニケル。其時源六、(歌省略)ト詠テ、ヤガテ城ヲゾ渡シケル程ニ、忽城ヲ破却シ、伽佐郡ヲ打捕テ武田ヘゾ渡シケル。

小出本卷三「朝倉太良左衛門入道宗滴進発加州之事」

永正十四年ニ若州ノ逸見氏俄ニ武田殿ニ意替シテ、丹後ノ延永源六ト云シ者ヲ語ヒ、八千余騎ニテ若州ヘ攻入シカバ、其比霜台孝景、武田大膳大夫ノ婿ナリシ故ニ、加勢ノ事申シ越シケレバ、即教景大将トシテ若州ヘ進発アリケル所ニ、延永其威ニ恐レテ一戦ニ不<sup>レ</sup>及忽引退テ、丹後ノ国伽佐ノ郡庫橋ノ城ニ楯籠ケルヲ、教景続テ攻入、即城ノ四面ヲ取囲ミ、息ヲモ繼セズ揉ニモンテ攻ラレケレバ、源六終ニ降参シ、死ヲ遁レテゾ出ニケル。其時源六、(歌省略)ト詠

ジテ、頓テ城ヲ渡シケル程ニ、忽城ヲ破却シ、伽佐郡打捕ツテ武田方ヘゾ出サレケル。

史籍本卷三「朝倉太郎左衛門入道宗滴進発加州事」

小出本卷二にみられる記事は、小出本独自の章段内にみられ、卷三の「朝倉太良左衛門入道宗滴進発加州之事」とは若干表現を異にする。卷三にみられる表現は、他の類の同巻同章段にみられる表現と近く、中でもI類と最も近い関係にあるといえる。同様の例として、その他、小出本卷二「美濃ノ斎藤ニ加勢付孝景逝去之事」内の「斎藤加勢」記事が挙げられ、小出本内における重出状況、他の類との関係等、「延永討伐」記事と同様となっている。

それ以外にも、重出記事の存在を窺わせるものとして、小出本卷二に次のような記述がある。

近江ノ浅井ヘ加勢ノ事

義晴將軍ヘ加勢之事

享禄元年五月廿五日御相持衆ニ成天文四年四月廿二日律例御免也

右二箇事武功雖<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>之金吾教景ヲ大将トシテ忠戦故金吾之勲功専也依而略<sup>レ</sup>之

これらは章段名のみで、本文はみられないが、左注により、元は本文が存在していたことは明らかである。また、卷三にこれらの章段名に相当する記事(「浅井加勢」記事と「義晴加勢」

記事）がみられることから、重出していたと考えられ、卷二本文が省略されていることを除けば、先の二例と同様である。

先行研究では、小出本は、現小出本と大きくは変わらない形を原小出本として甲類本原本と想定し、それを最先出のものであるとする。だが、成立当初の段階でこのような重出が起ころとは考えにくく、また、笹川氏が『太平記』の利用において呈した疑問からも、原小出本が最先出であるとは見做し難く、それより以前の段階の存在を想定すべきであり、同時に原小出本とされてきた形は、現小出本に至る途中の段階として、旧小出本とすべきではないかと考える。

次に、旧小出本に至る過程として、原小出本から現小出本巻一・二に相当する章段構成へと後に改編され、その際、卷三の章段（目録内の章段名では「宗滴昔年発向諸国之事」に相当する）から重出する巻二の記事が作られたと仮定した場合、すべて同一章段内にあり、しかも、宗滴の勲功によることが明らかであるにも関わらず、先の左注の理由により省略がなされることは考えにくい。

そこで、現小出本巻一・二相当部分を原小出本の段階に存在したものであるとし、そこにⅠ類本が略記された形で取り入れられ、その際、重出したので、その内容に相応しい巻三が残さ

れ、巻二の記事が不徹底な状態で省略されてしまった、とするのが妥当ではないかと考える。ただし、巻一・二にもⅠ類本が取り入れられている為、すべてが原小出本に存在したと考えることはできない。他にも、Ⅲ類本の記事・表現や寺社関係等の独自記事が、現小出本の成立過程において取り入れられていると考えられる。

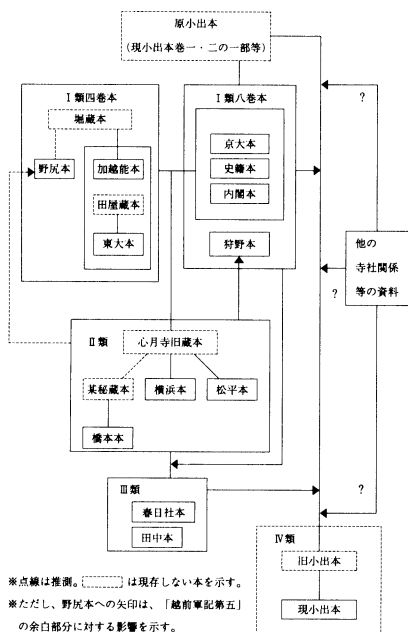
以上のことから、一部に最先出を残すものの、現小出本の成立は他の類よりも新しいと考えられる。また他に同類に属するものがなく、原小出本はあくまで想定上のものであることから、敢えて一番時代の下るⅣ類とし、小出本をそこに位置付けておくこととする。

#### おわりに

以上、『始末記』伝本を簡略な形で分類した後、Ⅱ類とⅣ類に関する考察を行ってきた。紙面の都合上、示すことが出来なかつたが、Ⅲ類本には、Ⅰ類本と近似する部分が指摘できることから、その成立に際して、底本としてⅡ類本が用いられただけでなく、Ⅰ類本も参照されたと考えられることを記しておきたい。

以上のことから、『始末記』伝本は、誤解を恐れずに記せば、

次のように位置付けられる。



なお、笹川氏が指摘する『太平記』との距離という観点からの全体的な位置付けも必要であるが、それについては、『太平記』の影響とともに、稿を改めて述べることにしたい。

注

(注1) 「近世の軍書—近江の戦国時代を描いた作品を例として—」(『軍記物語とその劇化』国文学研究資料館編

臨川書店 平成十三年)

(注2) 「福井県地域史研究」四 昭和四十九年

(注3) 「女子大國文」117 平成七年六月(笹川氏『戦国軍記の研究』和泉書院 平成十二年に再録)

(注4) 小出本・野尻本・橋本本・田中本は、松原信之氏より拝借した紙焼資料による。深謝申し上げます。史籍本・

横浜本・春日社本は刊本(『改定史籍集覧』第六冊・『福井市史 史料編 2 古代・中世』・『越前一向一揆関係資料集成』)に、東大本・松平本は所蔵・保管機

関からの紙焼資料に、京大本・加越能本は福井県立図書館蔵紙焼資料に、狩野本は関西大学図書館蔵マイク口写真による。なお、小出本は、福井県立図書館蔵紙焼資料も参照した。

(注5) 先行の分類との煩雑さを避けるため、呼称を変更した。

(注6) 以降II類本文として、横浜本を用いる。

(注7) 福井県 昭和六十二年

(注8) 『平泉寺史要』(福井県大野郡平泉寺村 昭和二十五年)

九十九頁参照。

(注9) 曾根正人氏 統神道大系 論説編『元亨釈書和解(一)』(神道大系編纂会 平成十四年) 解題参照。

(注10) 河村孝道氏『諸本対校 永平開山道元禪師行状建搢記』(大修館書店 昭和五十年) 所収。

（注11）二木謙一氏『明智軍記』（新人物往来社 平成七年）による。

（注12）前掲注11書解題・注参照。

（注13）松原氏「壬生本朝倉系図について」（『日本海地域史研究會編 文献出版 昭和五十九年』参照）。

#### 付記

・引用に際して、私に句読点等を付し、振仮名等を省略した。  
・貴重な資料等を閲覧させて戴いた、関係機関・関係各位、資料を拝借させて戴いた、松原信之先生、並びに本稿をなすにあたってさまざまな御指導を戴いた、鶴崎裕雄先生・笹川祥生先生に深謝申し上げます。

・本稿は、関西軍記物語研究会第48回例会（平成15年7月21・22日、於国民宿舍余呉湖荘）での口頭発表の一部に基づく。席上等で御教示戴きました先生方に深謝申し上げます。

（せと ゆうき／本学大学院生）